



発行日 平成23年6月17日

発行者

富山・ミラノデザイン交流倶楽部

高岡市オフィスパーク 5

社団法人富山県デザイン協会内

TEL.0766-63-7140

執筆 池田美雪 * ミラノ在住

i Saloni “50 years young.”

4月12日から17日までの6日間、ミラノ・ロー国際展示会場並びにミラノ市内で、第50回 i Saloni (通称ミラノ・サローネ)が開催された。

ミラノ・ロー国際展示会場敷地内(展示総面積53万平米、実質展示面積21万平米)には、昨年度の出展者数2542を上回る出展者総数2775(出展者数内訳: Salone Internazionale del Mobile 1467社、Euroluce 479社、Salone Ufficio 129社、SaloneSatellite デザイナー700名-20校からの学生含む)が集い、ビジネスを分かち合った。又、来場者数は最終日の統計によると、32万1320人(内28万2483人が業界関係者)に達し、その内の63%は国外からの来場者である。前回のEuroluceが併催された2009年比2%の増加となっている。また、計5967名のジャーナリストが来場したが、ほとんどがイタリア国外からの取材であった。

今年のiSaloniは「50 years young.」とサブタイトルが打たれた通り、1961年にFederlegno(現Federlegnoarredo)とCOSMITの共同主催により展覧会が始まってから50周年という重要な節目にあたるイベントであった。ミラノ・ロー国際展示会場では、第26回 Euroluce、第15回 SaloneUfficio、第14回 SaloneSatelliteが併催され、これらに関連して照明とオフィス環境を考えるセミナーやシンポジウムが連日催された。

また同時に、ミラノ市内ではCOSMITの主催・後援により“Quarta edizione Le fabbriche dei sogni - 第4回夢の工場 (Triennale Design Museum)”、Principia “Stanze e sostanze delle arti prossime - 次世代のアートの実験と本質”、Cuorebosco “Luci suoni e alberi di nebbia dove è nata la città - 森の心・街が生まれた場所の霧の光、音、樹木”、“La mano del grafico - グラフィックデザイナーの手”、MonteNapoleone Design Experience by Citroën “A Dream Come True - 夢の到来”が開催され、中心街のデザイン関連ショールーム70カ所ではミラノ・ロー国際展示会場との連動イベント、ミラノ・サローネの期間中は“City Dressing”プロジェクトとして街角にミラノ市やエキスポ2015年の旗、万国旗が掲揚されるなどし、ミラノ・サローネ50周年が華やかに祝福された。

東日本大震災の影響で懸念されていた日本企業の出展だが、COSMITからの情報によるとキャンセルは1件もなかったそうである。この度の震災後、イタリアのメディアは盛んに「日本人の強靱な精神性、勤勉さ、モラルの高さ、協調性」を再評価する報道を行ってきたが、その評価を裏付けるかのように日本企業がこの危機に屈する事なく世界へビジネス・アピールを行なったことは、日本経済の確固たる存在意義を再認識させる良い機会であったに違いない。



街中に貼られた、2011年のiSaloniのポスター。



ミラノ・ロー国際展示会場から、怒濤のごとく溢れる来場者たちの波。



街角にはさまざまな展示の宣伝ポスターが出没。



東日本大震災への支援金を募る募金箱。

Federlegnoarredoのウェブサイトより、ミラノ・サローネの様態を日ごとにまとめたビデオを見る事ができます。残念ながらインタビューのほとんどがイタリア語によるもので字幕がありませんが、フィリップ・スタルクへのインタビューや新製品、そしてi Saloniの会場の雰囲気を感じ取って頂けると幸いです。

リンク: <http://www.federlegno.it/tool/home.php?s=0,1,30,767,768,4943,5254>

“i Saloni” - 飛躍の歴史

1961年9月24日、イタリア製家具販売の国外進出を目的に、小さな家具業者の組織であったイタリア木工家具連盟Federlegno(現Federlegnoarredo)とCOSMIT (Comitato Organizzatore del Salone del Mobile Italiano)の主催により第1回Milano Salone del Mobile - ミラノ家具見本市が開催された。

戦後復興期を終え、国内需要が飽和状態になってきたことにより国外進出への可能性が生まれ、一社単体では困難であるが、多数の企業が1つの組織として国外市場の可能性を探る為の手段としてこの展示会が企画された。イタリア各地ではすでにいくつかの国際展示会が行なわれていたがあくまでもローカルなレベルであったため、経済の中心であるミラノで開催するのが適切との判断により、Tito Armellini氏の指揮の下、イタリア木工コルク工業連盟Alta Italiaが優良企業13社を招集し、ミラノ家具見本市実行委員会が発足された。招集された代表13名は、Michele Barovero, Alessandro Besana, Franco Cassina, Piero Dal Vera, Vittorio Dassi, Angelo De Baggis, Mario Dosi, Aldo Falcioni, Angelo Marelli, Angelo Molteni, Silvano Montina, Mario Roncoroni, Vittorio Villaであった(敬称略)。

第一回目は、ミラノ市内に現在“Milano Fiera City”として残っている旧ミラノ国際展示会場のパビリオン28, 34号館にて開催された。

その4年後、1965年には、後に2009年までCOSMITの代表取締役を務めたManlio Armellini氏の直感的なアイデアによって、パビリオン30/3号館新設を機会にその館内で Anomina Castelli, Arflex, Bernini, Boffi, Cantieri Carugati, Cassina, Cinova, Elam, Kartell, Mim, Molteni, Pierantonio Bonacina, Poltrona Frau, Poltronova, Rossi di Albizzate, Saporiti, Sormani, Stildomus, Tecno各社が1つのスペースを共有し一丸となってイタリア製品のアピールを行なった。また、この年より参加企業それぞれがブースデザインに大きな関心を払い、デザイン誌DOMUSは初めてミラノ家具見本市の特集記事を掲載した。初の展示会関連イベントとして、イタリア家具デザインの回顧展が行なわれたのもこの年であった。

この家具見本市の成果は、瞬く間に数字となって表れた。1960年には58億3700万リラであった家具製品の輸出高は4年間の間に約4倍の160億リラへと成長したのだ。

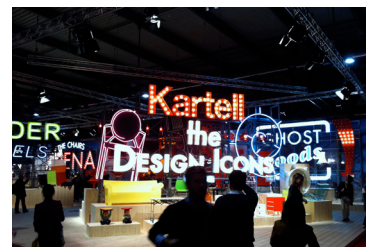
1967年、ミラノ家具見本市は「国際」家具見本市へと発展。

その後数年の間に、展示会の拡張と商業分野の専門化が押し進められ、戦略的に新たに6つの展示イベントが併催される事となった。

1974年にキッチン関連製品国際見本市“Eurocucina”、それに続き1976年には照明関連製品国際見本市“Euroluce”が、アイデア、デザイン、テクノロジー、イノベーションを議論するフォーラムを伴って始まった。これに続き、1982年にはオフィス環境を考える国際見本市“Eimu”が開始され、2008年



地下鉄に貼られたアート・イベントのポスター。



Kartellは“イタリアンデザインのアイコン”と題して、華々しく大規模の展示を行なった。



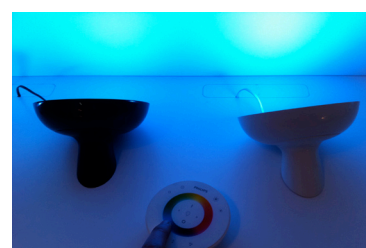
吉岡徳仁氏によるMOROSO社ショールーム内でのインスタレーション。



デザイン誌DOMUSの街頭広告。



Euroluce館内は、様々な光源を多様に用い、各社が光の芸術を競い合った。



フィリップ社は、LED光源に調光機能を加え、無限な光の数を実現。

に“SaloneUfficio”と改名されると同時に、オフィスと密な関係にある照明関連製品の国際見本市EuroLuceと同年に開催されることとなった。

毎年多くの企業が未来の才能を掘り出す場として注目されるサテリテは、1998年に、若手の創造力の開拓を主旨にCOSMITのメンバーによって捻出された。

2006年、ミラノ国際家具見本市は従来のミラノ市内の展示会場から、建築家フクサスによって設計されたミラノ・ロー国際展示会場へとその拠点を移し、この年より市場の要求に応えバス関連製品国際展示会“il Salone Internazionale del Bagno”が併催となった。

以来、奇数年にEuroLuceとSaloneUfficio、偶数年にEurocucinaとil Salone Internazionale del Bagno、そして毎年インテリア関連製品国際展示会、サテリテが併催されており、このすべての展示会を一括して、“i Saloni”と名付けられている。

あくまでも専門分野の展示会であるが、異なる業種が交差する場であり、仕事と現代工業の解釈の在り方を見て取れる展示会として国際的に大きくその機能を果たしている。特に大企業から中小企業まで、おのおのが新製品を提案できること、業界関係者すべてがコミュニケーションし合える特殊な時間を共有できることは、本質をついた独特の展示方法を培ってきたこの展示会独特の魅力である。

“i Saloni”のもう一つの魅力は、展示会に連動して開催される数々のアート・イベントである。COSMITは、商業ベースの展示イベントと並行して、数年来、アートと文化に焦点を絞ったイベントへその場を提供しているが、このオーガナイズーションは1965年に行なわれた「イタリア家具回顧展-1945年から今日まで」に端を発している。その後、これらのイベントを毎年打ち出していくことにより、イタリア産業の従来とは異なった側面や、巨匠デザイナーたちの功績、デザイン、アート、ファッション、フードの結びつきなどが脚光を浴びる事となった。

2005年より、長年出展を続けてきたミラノの家具メーカーたちの要望を受け、毎年5月にニューヨークで、10月にモスクワで、ミラノ・サローネ国外版 “i Saloni WorldWide. Furnishing Ideas Made in Italy”が開催されている。

1961年に開催された第1回目は1万1860平米の展示面積に328社が出展、来場者数は1万2100人であったが、50年後の今年2011年は21万500平米に2720社が出展し、32万1320人の来場者を記録したことから、この国際展示会は世界的な成功例といえるであろう。

1961年初回から2011年までのミラノ・サローネのポスターを下記のリンクよりダウンロードできますので、ご覧下さい。

リンク: <http://www.salonesatellite.it/tool/home.php?s=0,2,67,72,792>

未来を夢見るサローネ・サテリテ

第14回サローネ・サテリテのテーマは、i Saloniの50周年を記念して“Progetto 50+50 – Disegnando il Futuro – 50+50 プロジェクト – 未来をデザインしながら”。サテリテ内に設置された9つのインスタレーションも、これまでの50年を振り返りつつこれからの未来を意識して革新的なコンセプトを基に制作された。6人の若手建築家・デザイナーと3つのデザイン関連の大学が、サテリテの今年の



オフィス環境を豊かにする照明器具の提案。



近年、ファッション業界からの参入が目立つ。



広々としたスペースで、創造性の高い展示が目立つ。



来場者参加型の展示は、イベントならではの楽しみとなっている。



天井に鏡を配することで、3次元空間を存分に活用した展示。



サテリテ館のエントランスに設置された、今年のテーマ「50+50 プロジェクト」。

テーマを咀嚼し、立体にそれぞれの思いを込めたインスタレーションは、これからのデザインの方向を示唆するものであった。

Carlo Continと”Forever Young”は、デザインが我々を幸せにさせ夢を見る事を教え続けてくれるだろうと祈りを込めた作品を。Catalan de Ocon + Faccinは、将来の担い手である現在のデザイナー達を頭上から眺めるタワー”Future Spotting”を出展。Lorenzo Damianiは「資源の保護」をキーワードに、従来とは異なる方法を用い、貧しい素材の価値を高めようというコンセプトの“New Life”を出展。Daniel Rybakkenと“Daylight Installation”は、太陽光を介し技術と素材の発展の継続に呼応した作品を。Carolina Suelsは、質の高い生活への希望と生命の本質への回帰の可能性を”New Nostalgia”にて表現。Sean Yooと”Infinite Loop”は、家具の機能と再利用の終わりなき循環への変化を想像し、モノと単機能のスペースの終焉を布告。la Bezalel Academy + d-Vision Master di Gerusalemmeは”Ultra Gamma-Design Heal With The Un-Seen Waves”と題した、人類の問題を7日間で解決する未来的インスタレーションを提案。ニューヨークのColumbia Universityと”The Social Cave”は身体とデジタルの接触を超越した、新たな社交化の手段を考案。Scuola Politecnica di Design di Milanoは、未来のスーパーマーケットである都市型農場を提案。それぞれが、独特の切り口で未来社会とデザインの接点を示唆する作品を打ち出し、非常に刺激的なインスタレーションであった。

今年で2回目を迎えるSalone Satellite Awardは、需要と供給、企業とデザイナー、創造力と製造のそれぞれの接点をより深めることを主旨とし、EuroluceとSaloneUfficioの併催に伴い、サテリテ出展デザイナーから照明とオフィスに関わるデザインのプロトタイプを募った。建築家Mario Bellini氏やMoMaのシニア・デザイン・キュレーターPaola Antonelli女史など、デザインと工業界で国際的に活躍する9名の審査員により入賞作品が選ばれた。

素材の意外性やその軽量さよる表現力により、満場一致でドイツ人デザイナーElisa Strozzykの作品“Accordion Cabinet”が1位入賞。2位には、同じくドイツ人デザイナーRobert Hoffmannによる作品”Modular Light”が、そのシンプルさと存在感の絶妙なコンビネーションにより選ばれた。3位は、次世代の光源として評価されたセルビア人デザイン・グループDSigned-Byによる作品”Lamped”が獲得した。入賞者には賞金が授与される他、コンサルティング・サービスや広報の保証、入賞作品の頒布が約束されている。

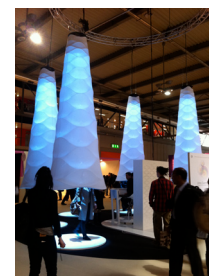
毎年、200のブースの争奪戦が行なわれるだけあり、この競争を勝ち抜いて展示された作品は今年もそれぞれ大変クオリティの高いものであった。去年と同じ作品はほとんど展示されていなかったが、昨年大きな注目を浴びていたスウェーデン人デザイナーDaniel Rybakkenによる照明インスタレーションは、iSaloni50周年を記念してサテリテ内の特設スペースで展示された。静寂な光と影による彼の作品は、デザインとアートがほどよく融合し、時空を超えた感覚を見るものに与えていた。

若手デザイナーにとって、モノ作りの原点は生活を楽しくそして豊かにすることであり、企業のコマースベースのコンセプトとは一線を画す。出展者は出身国ごとの社会背景と「今の文化」を切り取ったかのように、思い思いのデザインをサテリテへと持ち込んだ。

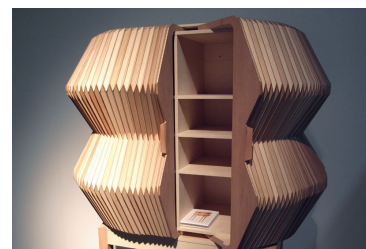
今年「新鮮」だと感じた、いくつかの作品を紹介したい。



LorenzoDamiani制作による「New Life」。



人類の問題を7日間で解決する、「Ultra Gamma-Design Heal With The Un-Seen Waves」。



Salone Satellite Awardの一位を獲得した、「Accordion Cabinet」。



Salone Satellite Awardの二位を獲得した、「Modular Light」。



飼い主とペットが楽しく暮らす提案として、ペット用のインテリア用品が注目を浴びた。



特設スペースで展示された、Daniel Rybakkenの作品群。

オーストリアのデザイングループSupertexは、独自に開発した、3次元に自由に形成できる繊維チューブ”Splinetex”を発表した。コンピューターで計算されたチューブの立体形状を化学樹脂を注入し固めた後、用途に応じてグリッドなどに組み立てる。従来の型取りの製法に比べ格段にコストが低く、仮設のルーフやパーティションとして発想次第で多くの用途に活用でき、見た目にも軽やかでデザイン性に優れている。

同じく、デジタルで作成した立体を実現した作品群を発表したgt_2Piは、南アメリカ大陸チリからの参加。ヨーロッパの土壤では生まれ得ない大らかな曲線を、絶妙なセンスで家具の機能に融合させているのが非常に新鮮であった。

数年前から毎年新作を出展している武藤努デザインのOPTONEシリーズ。今年の新作は、揺れにあわせて色彩が変化するLED光源を内包する球形のペンダント・ランプであった。新作毎に、LED光源の可能性と有用性を作品に込めて私たちが驚かせてくれるのだが、消費電力が少ない、というLED光源の消極的な側面よりも、この光源でなければ作り出せない無限の色彩の変化が使い手の心に変化をもたらす、という積極的な有用性を追求するデザイナー兼研究者である。3月の震災後の輪番停電や節電により東京の明かりが暗くなった事に対し、光源に心地よい色を用いればこれまでのように明るくなくても、これまで以上に快適に暮らせるという持論を持つ。

もうひとつ、日本からの興味深い出展は、3-1 designによる新素材の提案。コットン地にステンレスを織り込んだ素材は、触るだけで調光・調色ができる壁布として活用できる。

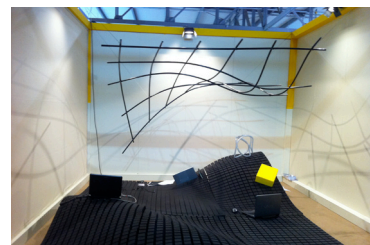
アートを推進するイベントの数々

今年ミラノ市内で行なわれたCOSMIT主催のイベントは、大変迫力があつた。「Cuorebosco ”Luci suoni e alberi di nebbia dove è nata la città – 森の心・街が生まれた場所の霧の光、音、樹木”」と題されたイベントは、ミラノ市の起源を体験するマルチメディア・プロジェクトとして開催された。

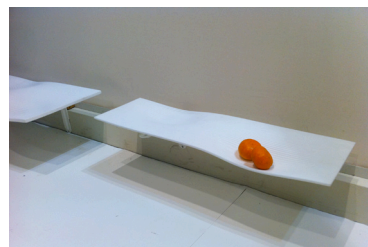
ミラノには、この街のアイデンティティの形成に貢献した2カ所の街の起源がある。一つは、他の地より若干隆起し、ケルト人が神聖な場所として崇拝していた森のあつた場所で、現在のサン・フェデーレ広場のあたりである。もう一つはローマ時代に街の中心であつたフォーロのあつた界隈で、現在のアンブロジーナ絵画館のあたりだ。12世紀ごろから、地理的にこの2つの起源のちょうど真ん中に相当するメルカンティ広場近辺から、ミラノの街は発展していった。

このプロジェクトは、2つの起源の内の古い方の起源を追体験し、サン・フェデーレ広場を、想像力をかき立てるその過ぎ去った時を再び反響させる場所へ変化させようという試みである。広場には、数メートルの高さの木々の集まる森が作り出され、様々な鳥類の鳴き声と全体を包み込む霧の中で、太古の1日を追体験する6つのエピソードが色彩豊かに演出された。鳥達の鳴き声が静寂な広場に反響し、観衆は、まさに神聖でまるで時が止まったかのような荘厳な感覚に包まれた。

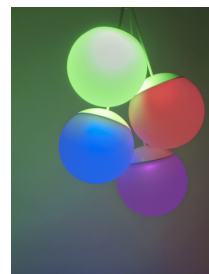
もう一つパワーを感じたイベントは、ドウオーモ広場で開催された、「Principia



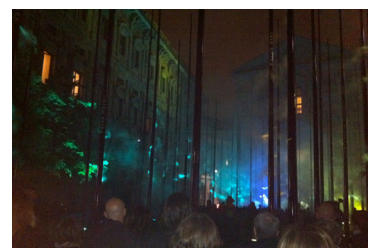
デザイン・グループSupertexが開発した新素材Splinetex。



gt_2Piは、大らかで美しい曲線を用いた家具シリーズを発表した。



OPTONEの新作は、揺れるごとに緩やかに光源の色が変化するペンダント・ランプ。



サン・フェデーレ広場で連日公演されたCuoreboscoは、繁華街でありながら、幻想的な空気に包まれた。



イタリア建国150周年を祝うルミナリエが、ヴィットリオ・エマヌエーレ・ギャラリーを煌々と照らす。



分子を模した仮設展示場は、ドウオーモ広場に設置された。

”Stanze e sostanze delle arti prossime- 次世代のアートの部屋と本質”
と題されたエキシビジョンである。「分子」を模倣したパビリオンは8つの部屋
に分けられ、異色のデザイナーDenis Santachiaraのディレクションのもと、
それぞれの部屋で、音や視覚、建築、工業芸術を実現する為の原動力とな
る「科学」を起因とする「Principia(始まり)」が表現された。人間の感覚を介し
て、現代ではどのように「Principia」が増殖しているかを伝えようという主旨で
ある。

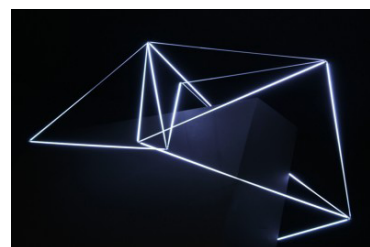
「Principia」の8つの部屋は、アート史の創造とその歴史を特徴付けてきた
数学、幾何学、視覚、磁石、電機、電子、とのそれぞれの関係を明確にする
導入スペースから構成される。

ルネッサンスの父である芸術家ジョットが、対象物に三次元を与える光点
の「Principia」との関係を見だし、また建築家ブルネレスキとレオナルド・
ダ・ヴィンチがパースペクティブの「Principia」から数々の作品を生み出した
事実などを顧みて、現代アートに何が起きているのか、また現代のアーティ
ストがアート表現においてどのように「Principia」を使うことができるのかを探
るといふ、とても興味深いエキシビジョンとなった。それぞれの部屋では、現代
アーティストと科学者がコラボレーションし、革新的な技術へ誘うことができ
る「Principia」を使ったアート作品を展示した。

ここ数年の傾向として、ファッション界とデザイン界の融合が年ごとに高ま
ってきているが、今年はモンテナポレオーネ通りで「Monte Napoleone De
sign Experience by Citroën “A Dream Come True - 夢の到来”」が開催
された。これまでに、有名ブランドのブティックがホームコレクションを発表す
る形で、ミラノ・サローネに単独で参加するケースはいくつもあったが、1つの
地区としての参加は今年初めてである。この通りをオープン・スカイのミュ
ージウムとして見立てるといふモンテナポレオーネ通り協会の発想であるが、イ
タリア建国150年とi Saloni50周年への祝いを込めて企画された。COSMITと
の共催、また自動車メーカーのシトロエン社がスポンサーとして参画した。通
常から、この通りのブティックのショーウィンドーはたいへん華やかに、美術
館のショーケースのように繊細でダイナミックな空間を見せているのだが、今
回のイベントはそれらを昇華させたといった感じであった。フランスの若手デ
ザイナーOra-Itoがシトロエン社と共同でデザインしたインスタレーションが広
場に壮観に展示され、モンテナポレオーネ通りでは、これまでにサテリテに出
展された作品の中から、後に製品化された歴代の作品がガラスショーケース
の中に展示された。

原点に還るフォーリ・サローネ

ここ数年、フォーリ・サローネのメイン会場となっていたZONA TORTONA
は今年から組織が変わり、TORTONA DESIGN WEEKと名称を変えた。そ
のためか、VENTURA-LAMBRATEに首位の座を奪われた感じであった。例
年通り、展示数は非常に多かったのだが、スペースのレンタル料の高さゆえ
か、資本のある企業が中心となり、コマースベースの大規模な展示が目
立った。その中で、日本企業のキャノン社、INAX社、カネカ社、TOSHIBA社
のエキシビジョンは、それぞれがたいへん迫力のある構成で他の展示と異な



Carlo Bernardiniによる「Principia」を
模索する、照明を用いた作品。



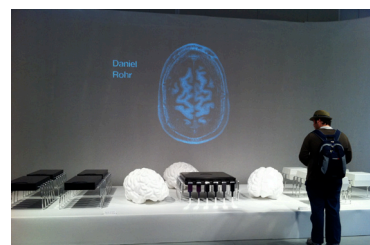
モンテナポレオーネ通りが始まる広場
に展示された、Ora-Itoのインスタレ
ーション。



Triennale Museumでは、「夢の工場」と
比喩されたイタリアンデザインの数々が
が展示された。



毎年色鮮やかな
ホーム・コレク
ションを発表する
MISSONI。



人間の脳を解体したアート・インスタ
レーション。



実物のミニ・ケー
バーをクレーンで
吊るした、目を見
張る展示。

り、来場者から感嘆の息が漏れた。

今年で4年目の出展となるキャノン社のエキシビジョンNEOREALは、昨年「空気の器」が話題となったトラフ建築設計事務所と、ヴィジュアル・デザイン・スタジオWOWのコラボレーションによって制作された。「NEOREAL WONDER」と題された今回は、2つの大きなスクリーンに映し出された色とりどりの画像が、スクリーンとプロジェクターの間に張られた糸の束に流れ出すというもの。床にはゆるやかな起伏がなされ、歩くごとに見る者の視点が変わり、同じ画像の見え方が変わる。見る者の頭上にはあざやかな色の光が交差し、浮遊感のある異次元的な空間であった。

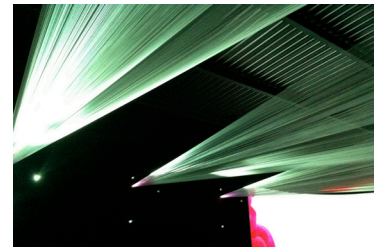
OLEDの製造メーカー、カネカは、「美しき日本の酒場を彩る、新感覚あかりオブジェ」をテーマに「カネカOLEDデザインコンペティション2010」を開催し、このコンペで大賞を獲得した作品「Pieces of Light」を展示した。小さな光源が床と天井一面に無数に蛍のように輝き、幻想的な光を放っていた。

INAX社は今年初めてサローネへの出展を遂げた。ヨーロッパの入浴スタイルと日本の技術を合わせ、新しいバスライフの提案を試みた。少量の水で作られ出された細かな泡でバスタブを満たし、バスタイムをよりリラックスできるシステムは日本に先駆けての発表となった。会場では、来場者に直に泡に触れてもらい、心地よい感覚を肌で感じてもらうデモンストレーションが注目を浴びていた。バスタブと会場のデザインは、長くイタリアでも活動をされていた喜多俊之氏によるもの。

今年で連続3年目の出展を果たしたTOSHIBA社は、新照明システム事業のコンセプト展示として、「Luce Tempo Luogo<光・時・場>」と題したアート・インスタレーションを開催した。築100年以上経過した古い建物の中に、光の雨を降らせるというもの。このインスタレーションのクリエイション・パートナーである建築事務所DGT(DORELL.GHOTMEH.TANE/ARCHITECTS)は、設計に際し常に歴史的背景に重点を置くことで高い評価を得ているが、今回もミラノにある20カ所以上の建物を見た後「時に呼応する光、光に変わる時」というコンセプトにはこの建物しかないと確信しこの場所を選んだ。白いトンネルを抜けると、1000個以上のLED光源により天井から連続して落ちてくる無数の水滴が照らさされる。来場者は、この空間で輝く水滴に見とれ、静寂で幻想的なひと時を過ごした。

今年のフォーリ・サローネの中で一番話題になったオーガナイゼーションは、なんといってもVENTURA-LAMBRATEである。トルトーナ地区と並んで、ミラノ・トリエンナーレ、ブレラ地区、Fabbrica del vaporeなど毎年メインとなっている場所がありそれぞれ見応えはあるのだが、地区全体の新鮮さやクリエイティブ性からみるとVENTURA-LAMBRATEは断然トップである。

この地区は、昨年よりINTERNI誌主催のフォーリ・サローネと一線を画して、Organisation in Designが独自に主催、運営を行なっている。ミラノ市の西に位置するこの元工業地区には、現在インテリア雑誌ABITAREの本社があり、そのゆったりとした敷地内にインフォメーション・センターが設置され、主に2つの通りに面した数々のスペース内で大小あわせて49の展示が行なわれた。ミラノ市街の環境とは異なり、展示に利用されたスペースは工場跡や倉庫といった広々とした空間であったり、中庭を配する新築のロフトであったりと、ゆるやかな配置であるため、展示者と来場者共々のんびりとした空



今年で4年目の出展となるキャノン社のNEOREAL。



カネカ社の展示エントランスに吊るされたインパクトのある暖簾は、アルファベットで書かれた社名を表している。



INAX社の展示で、バスタブにはられた柔らかい泡の感触を楽しむ来場者達。



TOSHIBA社のインスタレーション。



テーブルウェアのデザインの発表に、サラダの試食を供するスイスのデザイナー達。



繊維デザインの展示の一つ。アフリカの伝統的装飾模様が、コンテンポラリーデザインに融合する。

気の中で展示を楽しむことができる。また、フレッシュでエキサイティングなデザインの世界を紹介するというコンセプトを軸に、若手クリエイターの新鮮な創造力をバックアップし、また若者層の来場者がイベント全体の活気を促していた。

それぞれの展示が空間構成と展示作品で個性を競う中で、非常にインパクトの強い展示を行なったのは、イスラエルの若手デザイナー達のPromise-design-New design from Israelであった。ブルーのLED光源をアクセントにした什器で全体を統一し、手の温もりが残るけれど洗練されたデザイン性の高い作品が多数発表された。

50年周年を機に、これまでの歴史を振り返ると同時に今後の50年に向けて、i Salonilは再出発を切った。VENTURA-LAMBRATEの成功例が、今後、このイベントの良き指針となることを願う。



中庭を有する工場内部で展示されたデザインの数々。



イスラエル人デザイナー達の多様なデザインは、繊細かつダイナミックで、圧巻であった。

執筆者 略歴

池田美雪 インテリアデザイナー

武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒

Istituto Europeo di Design 建築インテリア科卒

1994年よりミラノ在住

主に個人邸の改築、パブリックスペースの設計に携わる

設計外に携わったプロジェクトとして

”do it jubunde”展(無印良品、ニコレッタ・ブランズィとのコラボレーション)を企画ならび実現

”Soundesign”展(Marangoniファッションスクール主催)にて弦楽器”Caravantar”を発表

写真雑誌“ZOOM”日本版のコーディネイト、翻訳 など

“TuPlay”展にてグラス楽器”FASOLA”を発表

現在はクリエイティブ・コンサルティング会社(デジタルゲーム、ウェブсайт、グラフィックデザイン)の共同経営者として活動

しながら、デザイン・アートに関するコーディネイト、翻訳および通訳に携わっている

また、イタリア人新進デザイナー達を世界へ紹介するインタビュー・プロジェクト”11x11x2011”を企画制作中